

# 研究インフラとしての 大学図書館の将来

土屋俊  
(千葉大学)

# 同じ出発点

- JICST50年: 1957年
- NDL科学技術関係資料整備審議会:
  - 1953年「原子力関係資料整備委員会」
  - 1957年議運決議, 59,60年衆議院科学技術振興対策特別委員会申し入れ
  - 1961年改組 ⇒ 科審
- 大学図書館:
  - 1953年文部省『学術雑誌総合目録』 ⇒ IMIC、東大センター、NACSIS、NII
  - 1977年「外国雑誌センター館」整備へ
  - 1986年学術情報センター

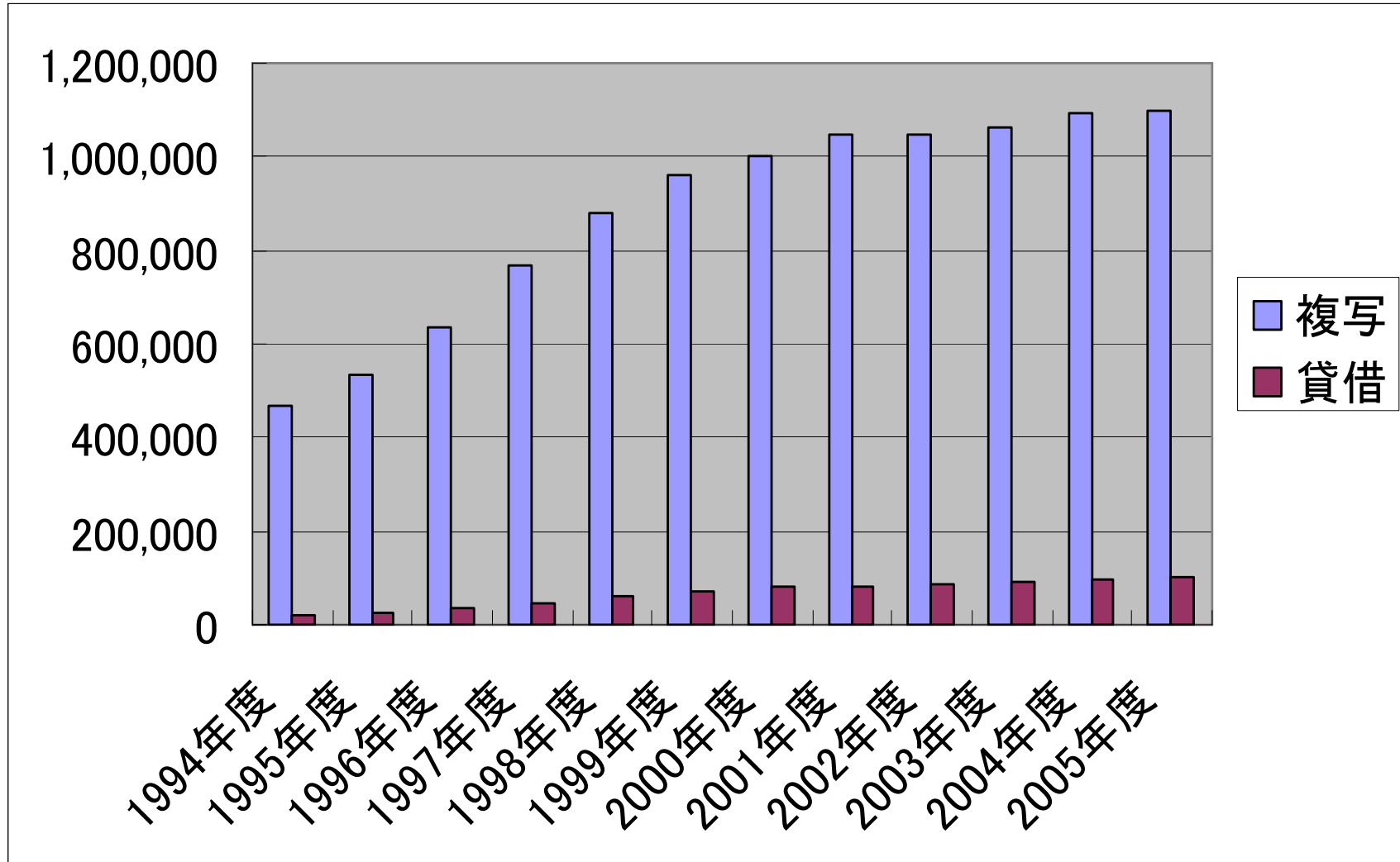
# 異なる観点

- 大学図書館： ILL志向
  - 医学系外国雑誌の共有
    - 医学図書館の伝統(1903年医学中央雑誌、1927年官立6医科大学図書館等)
  - 各分野の大学図書館間相互複写
  - 外国雑誌センター館の展開
- JICST： DD 志向
- ただしいろいろ複雑な問題：
  - 著作権 1970年代以降
  - インデクシングへの態度の違い(図書館が案外興味がなかった。オーバヘッド？『文献情報速報』)

# 大学図書館の外国雑誌その後

- 1980年代に図書館間複写が30万ない40万件となり、86年に学術情報センターができる
- 1990年代にはいり、NACSIS-ILLが稼働を始め、大学図書館間協力の理念の下で順調にILL流通が円滑化していく。
- 他方で、1990年代に日本の大学が予約購読する雑誌のタイトル数が(外国雑誌センター館の存在にもかかわらず)急減していく。

# 複写 >>>>>> 貸借



# 信頼できる制度の構築

種別		複写				貸借				全体		
年度		終了	キャンセル	合計	充足率	終了	キャンセル	合計	充足率	レコード合 計	総レコー ド件数	others
1994年度	平成6年度	468,321	24,506	492,827	95.0%	19,373	3,855	23,228	83.4%	516,055	516,075	20
1995年度	平成7年度	535,229	28,467	563,696	94.9%	26,414	4,735	31,149	84.8%	594,845	594,883	38
1996年度	平成8年度	637,860	34,096	671,956	94.9%	35,113	5,906	41,019	85.6%	712,975	712,976	1
1997年度	平成9年度	768,598	38,631	807,229	95.2%	46,319	7,547	53,866	86.0%	861,095	861,096	1
1998年度	平成10年度	881,786	44,436	926,222	95.2%	59,826	9,174	69,000	86.7%	995,222	1,012,209	16,987
1999年度	平成11年度	960,456	52,551	1,013,007	94.8%	72,988	11,324	84,312	86.6%	1,097,319	1,098,692	1,373
2000年度	平成12年度	1,000,412	59,894	1,060,306	94.4%	81,554	11,720	93,274	87.4%	1,153,580	1,156,438	2,858
2001年度	平成13年度	1,045,082	64,373	1,109,455	94.2%	82,521	11,631	94,152	87.6%	1,203,607	1,215,675	12,068
2002年度	平成14年度	1,045,366	68,076	1,113,442	93.9%	87,324	12,191	99,515	87.7%	1,212,957	1,232,239	19,282
2003年度	平成15年度	1,061,378	63,572	1,124,950	94.3%	91,387	12,021	103,408	88.4%	1,228,358	1,242,711	14,353
2004年度	平成16年度	1,092,116	60,428	1,152,544	94.8%	96,078	11,354	107,432	89.4%	1,259,976	1,265,260	5,284
2005年度	平成17年度	1,099,744	56,336	1,156,080	95.1%	100,668	11,877	112,545	89.4%	1,268,625	1,292,128	23,503

複写 (オーダーから資料到着までの所要日数)

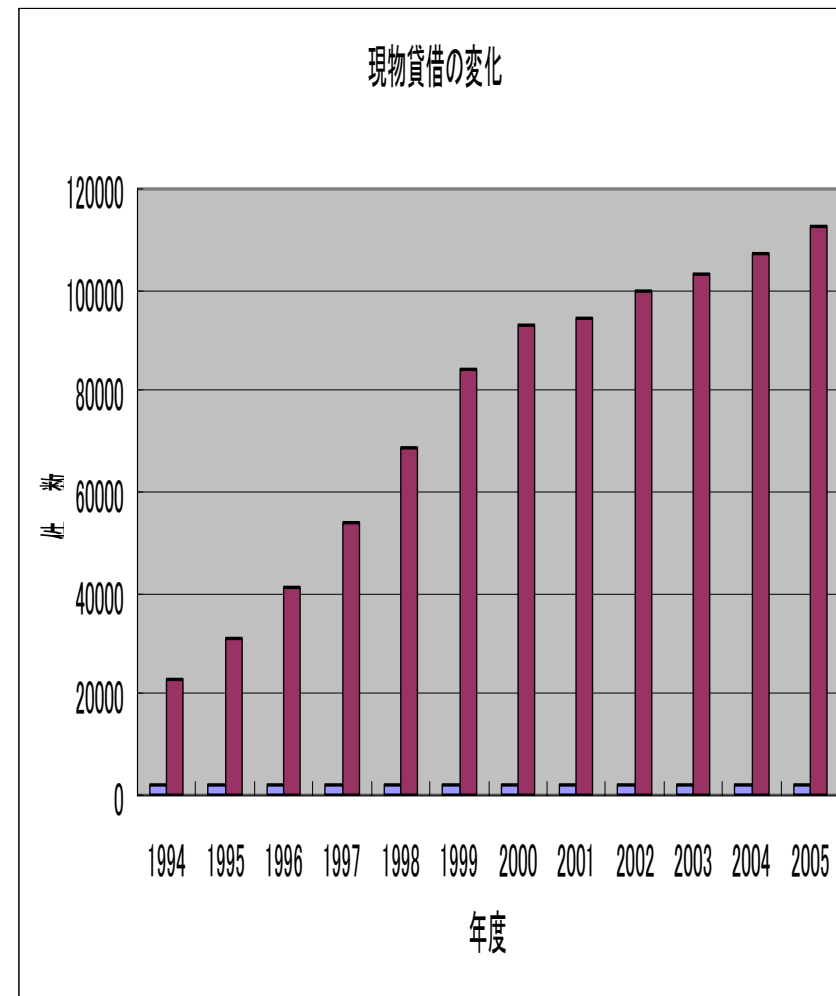
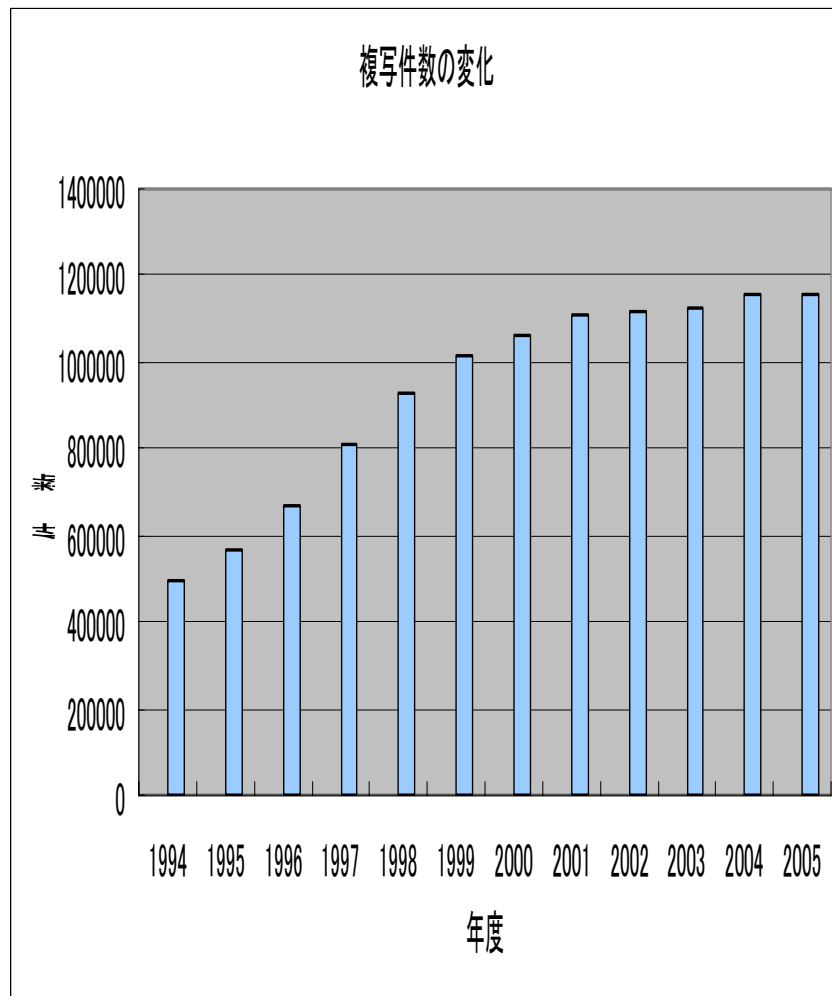
	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
平均	8.70	8.55	8.26	8.68	8.03	8.24	7.34	7.26	6.56	5.79	5.29	4.90
最小	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
最大	1,111	1,468	1,833	1,836	1,830	1,959	1,161	1,830	1,591	1,830	1,104	1,481
10パーセンタイル	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2
25パーセンタイル	4	4	4	3	4	4	4	3	3	3	3	3
50パーセンタイル	7	6	6	6	6	6	6	5	5	5	4	4
75パーセンタイル	10	10	9	6	8	9	8	8	7	7	6	6
90パーセンタイル	16	16	15	15	14	14	13	12	11	10	9	8
95パーセンタイル	25	23	21	22	20	20	17	16	14	13	12	11

現物貸借 (オーダーから資料到着までの所要日数)

	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
平均	10.34	9.29	8.07	7.41	6.87	6.59	6.23	5.77	5.41	4.97	4.62	4.27
最小	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
最大	506	368	398	371	867	315	1,111	1,660	1,103	1,194	1,103	854
10パーセンタイル	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	1	1
25パーセンタイル	5	5	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2
50パーセンタイル	7	7	6	6	6	5	5	5	5	4	4	4
75パーセンタイル	12	11	10	8	8	7	7	7	6	6	6	5
90パーセンタイル	21	19	15	14	13	12	11	10	10	8	8	7
95パーセンタイル	28	25	21	18	16	16	14	13	13	11	11	10

※数字の単位はすべて日数

# 90年代から2000年代への変化



# 21世紀：電子化による大変貌

- NACSIS-ILLの性格の変化：
    - 1990年代：外国雑誌掲載論文の共有
    - 2000年代：国内雑誌掲載論文の共有へ
  - インデクシングのパラダイム変換
    - 1990年代：構造化され、信頼されるインデクスの価値(大学はもともと文献データベースをあまり上手に使ってきていない。)
    - 2000年代：Googleで十分！いや、PubMedは必要。SciFinder Scholarは買うしかないという程度
- ⇒ オンライン・ハイパーリンク・フルテキスト・の時代へ

# つまり、「1950年体制」の崩壊？

- 海外情報を効率的、経済的に輸入して、共有するというスタイルはもはや維持されなくなっている
  - たとえば、NACSIS-CATの雑誌所蔵情報の信頼性の低下
- ワン・クリックでフルテキストに飛ばないサービスは相手にされない
- Googleから見えなければ存在していないという心理

しかし、JST、NDL、大学図書館すべて、まだ1950年体制を生きているような気がする⇒大学図書館不要論(少なくとも)！

# ではこれから、 大学図書館はどう研究を支えるのか

- 状況認識：
  - メタ情報の上流依存は当然。書誌は自分で作らない、論文コンテンツは自分で物理的にもたない(版元サーバ)
  - 研究は研究室で行われる、図書館では行われない
  - 論文はオフィスで書かれる、図書館では書かれない
- 帰結：
  - (少なくとも研究支援という観点からは)資料保管場所としての図書館の建物は不要(博物資料としての図書等の保存庫は必要)
  - 主要な責務(1): 研究情報環境の機関最適化
  - 主要な責務(2): 研究者情報環境の個人最適化

# 具体的には、

- 研究情報環境の機関最適化
  - 対価支払いを要する(電子的)資料の効率的導入
  - 機関の社会的説明を支援し、研究コミュニティに貢献する機関リポジトリの構築
- 研究者情報環境の個別最適化
  - 資料環境(既存、計画)と個別研究者とのファイン・チューニング ⇒ リエゾン・ライブラリアン
  - 研究過程における支援: データ保存・研究ノート保存とインデクシング・テーマ発見等々

しかし、依然として抽象的で失礼！そして、大学図書館には「教育」という逃げ道(?)が、、、

# ジャーナル電子化による外国雑誌論文依頼の減少、そしてなぜか国内雑誌論文需要の増大

